

# 芥川だより

編集発行人 下村嘉明

発行所着物から服を仕立てます

高槻市芥川町2-14-3

TEL 072-681-8870

発行日/2007年10月20日

ご希望の方にはお送りします

お気軽にお問い合わせ下さい。

e-mail: akutagawa\_dayori@yahoo.co.jp



## 芥川の写真屋さん

### 三本の柿木



「好きな果物は何？」と訊かれれば、躊躇なく「柿」と答える。なかでも種のある富有柿が一番だ。◆田舎の庭に、太い枝を大きく横に広げた三本の柿の木があった。二本は富有柿、一本はクボ柿である。朝晩が冷え込み、木々の葉が色づきはじめるころ、まずクボ柿が食べられるようになる。この柿は表皮が少し青く、身は固いが、糖分を多く含む。霜が降りるくらいに秋が深まってくると、富有柿が赤みを帯びて食べごろをむかえる。この柿は熟する一歩手前が美味い。◆私は、学校から帰るとすぐに柿の木に登り、柿をもいで食べたものだ。腹が膨れるまで、毎日十個以上は食べただろう。高校を卒業するまで、これが秋の日課だった。家族のものはあまり食べない。太い枝がたわむほどに実る柿は私の独占とあってよかった。◆柿の木は滑りやすく、枝は折れやすい。落ちる危険を冒してでも私は木に登った。木の上に登れば、家の屋根より高くなり、川向こうの権現山や同級生の家が見渡せるのだ。見晴らしのいいところで食べる柿はまた格別だ。得意になって食べていると、母が「ひとつボイデくれ」と見あげている。そんなことにも、自分一人だけの心地よいひとときが乱されるように感じた。◆数年前に「柿がたくさんあったけど、だれも食べへん」と母が嘆いて連絡してきた。「よっしゃ、明日帰るわ」とさっそく車を走らせた。その年は柿の豊作だったのだ。こんな美味しいものに見向きもしない人の気持ちが私には理解できない。秋に柿はなくてはならないものなのに。◆固からず熟れすぎず、いい頃合いに朱色に色づいた富有柿をかじると、ジュッと甘味が口の中に広がる、その瞬間を思い出しながら秋空を見あげると、うろこ雲が波打っていた。あの柿の木という小さな世界の中に浸って柿を夢中に食べていた頃がよみがえってきた。

### 芥川商店街歳時記

今月の予定

○秋の「文化際セール」11月1日～4日までの4日間。

○消防訓練 11月18日(日) 午前9:30～10:30 芥川商店街・日の出町自治会・高槻市消防団芥川分団の合同による、初期消火訓練や放水訓練。集合時間は午前九時です

深奥幽玄手談の交わり

囲碁で豊かな人生を!



日本棋院高槻支部

## 芥川囲碁サロン

(株)入谷商会経営

日本棋院棋士谷村義行八段による  
大盤解説毎月第二日曜日午後2:30より  
指導碁毎月第二日曜日午後4:00より

高槻市芥川町2-10-11(芥川商店街)

TEL・FAX 072-682-0403(代)

「みんな元気」という発声から始まる。わらじ医者こと、早川一光先生の声がテープから流れてくる。

「心はどこにあると思う」、参加者に問いかける風景。一人は身体全体にある、脳の中にある、心臓か、腹部か、先生の応答もさすが。

腹が煮えくり返ることがあるし、お人好しの反面、腹黒じや、ということもあり。私はお腹の中にある。胸三寸にあると思う。目を閉じて、自分の感情と闘ってみる。曖昧なままにしておくとなおぐつぐつとなる。

そこへ一通の手紙が来た。牧口一二さんの文。精神神経科との問答があり、早速抜粋させてもらおう。

「身体のどこを探しても心は宿っていない。人と人との間に生まれるのが心なんだ。」

それじゃあ、人と動物、人と植物、人と路地の石ころの間にも心があるんだ。

私は、この文を読んで、目の前が明るくなった。人間の絆、縁（えにし）のつながり等大切にしながら生きていくのだ。おかげ様で、と感謝の心を強く感じさせてもらった。一人の人間の中に、「心など無い、在る」という問答に何故か惹かれるものがあった。禅の世界でいう無とか空とかに、こたわらずということなのだろう。

灸（やいと）

父が毛むくじやらの足を出して、「三里の灸」をすえていたのが、私の子供の頃。

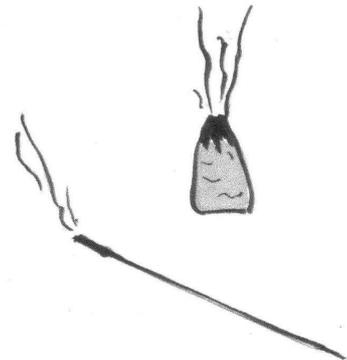
灸というより、ヤイトというほうが実感が涌くのは、悪い事したらヤイトやでと言うのが大人の決まり文句みたいなものだったから。

ちよつと口答えをしようものなら「ちよつとも親のいうことを聞かん子や」と言ったかと思うと馬乗りになって、ヤイトをすえられたのを思い出す。その時の母の顔が鬼のように見えたのも、あの熱さを思い出して、父と同じヤイト、灸をすえる羽目になった。足、思い出しても熱い。おかげでもう一度すえてみようと思うほど、足も痛くない。パーマ屋さんに言われる。「あなたの毛は黄髪だ。ヤイトの煙がついているのじゃない？ 普通は白髪だのに」と言う。

ヤイトのおかげで元気で、あちこち好きなように歩ける。ヤイトさんありがとう。今の親なら非難するだろう。あの頃のお仕置きのヤイトなんか日常茶飯事だった。だから、子供が素直だったのかも知れない。私もその一人、旅行で入浴したら、

「あなたの背中、何？」  
「ヤイトのあと」

「大分ヤンチャだったネ。」  
「ほつといて、ヤイトのおかげで今の自分があるんだもの！」



八十代

十二月の初めに私は八十代になる。

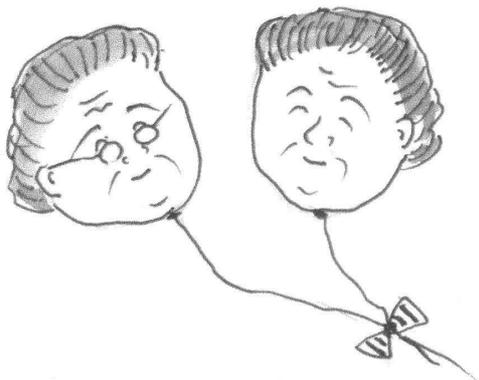
四十代、バリバリ向こう水鉄砲のように動いた。五十代、白髪を見て「もうバアさんだなア」といわれた事が生々しく甦って来る。今はもう諦めの気持ちである。何んともなれ！ 浦島太郎みたいに、若者から突然白髪の老人になるのは困るけど、普通に一年一年歳を取っていくのは当たり前で仕方がない。女性は世の中がどんなに変化しても、「女は若い方がいい」といわれるせいで、歳を取るほど身体が小さくなってくるように思う。「いや、あなたは大丈夫」「何が」と

反論したくなる。

老年のオバハンでも一人では弱い。しかし、「まおとか」とかいう言葉があるが、女をさしているのか、男をさしているのか、私には分かりにくい。まあ、どちらでもいいじゃない。人生楽しく生きれば。

甘い汁を吸いすぎると腐ってゆく人も多い世の中。特に中年を過ぎたら気をつけたほうがいい。実家から母によく似てくると言う。

言葉から 何から何まで 亡くなって、四十年位、母に似るのは嫌だと思っていた若い頃と違い。この頃では、母とのつながりが懐かしい。八十七歳だったもの。



## 大雪山縦走⑦

梵店主

半日の休養はよっちゃんに体力的にも精神的にも、落ちつきとゆとりを与えた。雲が切れて晴れ間ものぞいているが、風は相変わらず強い。陽が傾きはじめると、気温が一段と下がった。寒さが重石のようにずしりと身体全体におおいかぶさってくる。

午後四時、M蔵はラジオを聞きながら気象情報を天気図に書き込みはじめた。よっちゃんはストーブに火をつけ、夕食の準備に取りかかる。テント内が少し温かくなった。M蔵はかじかむ手をときどきストーブにかざしながら、不安げに「えらい寒くなってきたなあ」とよっちゃんに相づちを求める。よっちゃんはM蔵の書きかけの天気図をのぞいて「今晚はそうとう冷えるやろなあ」と独り言のようにつぶやいた。天気図はM蔵を不安にさせるにじゅうぶんな気圧配置を示していた。

夕食をとるころには、暗くなっていた。今晚のメニューはカレーだ。テント内に広がるカレーの香りに食欲がぐつとわく。よっちゃんは、レード漬けにした豚肉のペミカンをいつもより少し多めに入れた。熱いカレーは身体を芯から温めてくれるはずだ。このひとときが一日でいちばんほっこりするときである。

この日の晩はいつもと違っていた。熱いカレーでも身体の芯から温まるということがない。とにかく寒い。背に氷を押しつけられているようだ。すでに陽が落ちた外の気温は氷点下二〇度近くになっっているだろう。食べ終わるころには食器の底のカレーは冷えきっていた。

よっちゃんが鍋をお茶で洗っているとき、突然S太が「あすはトムラウシに登る」という。食事中ずっと天気図をにらんでいた。悪化する天候をまえに、あすの行動をどうすべきか考えあぐねているようだった。悩んだすえの判断なのだろうとよっちゃんは思う。

天気図を書いたM蔵は即座に「それは、やばいんじゃないですか」とS太をにらんだ。低気圧が東北地方をはさんで日本海と太平洋にあつて、北上中である。低気圧が速度を速めれば、あすの午後から山は荒れるにちがいない。M蔵は、あすは天候がくずれると読んでいるのだ。だがS太は「あさっては二つダマの低気圧が一つになり猛烈な吹雪となるが、あす一日、天気はもつ」とゆずらない。さらに「あした登らなかつたら、三日間は動けなくなる。あす一日に賭ける」という。けつきよくリーダーS太の決定にしたがうことになった。

よっちゃんには、どちらの判断が正しいかはわからない。むしろ、予測がはずれたとき、その状況にどのように対処す



るかの方が重要だと思う。そのときは、やはり経験、勘がものをいうのだろう。未熟な新人であるよっちゃんは、二人の先輩に従うほかない。

食事が終わっても、よっちゃんはストーブを消すのをためらっている。テント内で唯一暖を提供してくれる火だ。この火を消してしまえば、テントごと冷たく暗い闇の底に沈んでいくような気がする。でも消さないわけにはいかない。意を決してストーブの火を消そうとしたとき、よっちゃんはアイヌの神々の世界を思い出した。

そうだ、火の神にお願いしておこう。火の神さまは人間にもっとも近い神であり、人間の願いをいろいろな神さまに届けてくれる神だ。神々の窓口のような神だ。火の神にたのんで、風の神や雪の

神にわれわれを守ってもらおう。神には人を守る義務がある。そのかわり人々は神をきちんと祀って、お礼をしなければならぬ。ストーブの火を消すとき、よっちゃんは火の神に自分たちの無事をお願いした。

火を消すと同時に、テント内が急速に冷えてくる。アルミの食器を片づけるとき、指が張りついた。呼吸が眼鏡をくもらせ、まつげが凍りつく。テントの中はマイナス〇度にはなっているだろう。セーター、ヤッケ、着るものすべてを着こんでシュラフにもぐり込んだ。

その日の晩はぐんぐん冷えて、もつとも冷える明け方近くには、氷点下二五度を超えた。初めての寒さだ。この寒さで手足が凍えて眠れなかった。山が荒れくるうのはいつからだろう。明日の午後なのか、S太の予想どおり明後日なのか。はじめて経験する寒さと不安のなかで、三人は眠れぬ夜を過ごした。

快晴の朝を迎えた。問題は、この晴れがいつまで続くかだ。天気がかくずれる前にトムラウシ山に登って、テントに帰り着かなければならない。身軽に行動できるように、もっていくものは非常食やザイル、ヘッドライトなど最小限におさえた。

朝食のラーメンを胃袋にかき込んで、六時半に出発する。今山行における最悪の一日が始まった。

ルート⑥

東京からグンダリへの道のりは遠い。早朝東京を発って、長野駅に着くのは夕刻、その日は駅の近くに宿をとらねばならない。翌日、戸隠行きのバスに一時間ほど揺られ、停留所からは徒歩で急な山路を二十分かけて登って、ようやくグンダリにたどり着く。タケシには、街道からはずれた山あいにあるこの村が平家の落人村のように思えた。

式部を失ったのちもタケシは、時あらば、この長い道のりをいとわず、娘ミチコのいるグンダリに足を運んだ。式部への思慕は容易に消えることにはなかったのだろう、四十近くまで未婚を通した。

ミチコが五歳のとき、タケシはミチコを自分の籍に入れた。母の欄には式部の名を書いた。戸籍上は、彼女は山形に出生した事になっている。戸籍に入れたといっても、タケシがミチコを引き取ったわけではない。

タケシに連れられてミチコは山形に一度だけ行ったことがある。そのときの、寒々として広がる庄内平野の雪景色だけがミチコの記憶に残っている。庄内にゆかりのある詩人、茨木のり子

がつぎのように雪の庄内を詠んでいる。こういうイメージだといっていた。

雪 また 雪

白いというより墨絵に近く  
庄内平野は眠っている  
雪をかむって眠っている

こんな深々と半年近くも眠りほほ  
けているのだから

夏がくれば

精気に満ちて青田はうねるか

このあたりでは田植えとは言わない

五月(さつき)は始ったか

五月かかった という

五月は永遠に出来ないように遠く

雪女はひたすら土に淫して覆いかぶ

さる

..... (寒雀より)

やがてタケシは結婚して、三人の娘

をもった。結婚後も、タケシはミチコ

との連絡を絶やしていない。式部の命

日にグンダリの墓前に手を合わせるこ

とも欠かさなかった。式部という女性

と恋仲になり娘をもうけたことは、家

族は承知していたようだ。

僕には、この祖父タケシのことがた

いへん印象深く記憶に残っている。子

どものころ、ときどき東京のタケシの

家を訪れた。家族みんながこころよく

歓迎してくれたものである。

子ども目にも、三人の娘はほんとう

にきれいな女性に映った。末の娘は僕

の姉と同年である。俺は彼女たちの

名前を頭に置いて「○○お姉ちゃん」

と呼んでいた。お姉ちゃんたちは「坊

や、坊や」と可愛がり、いっしょに遊

んでくれた。たいへん居心地がよく、

夏休みに東京に遊びに行くのが楽しみ

になっていた。

タケシは好々爺であった。いつも穏

やかで、あまりしゃべらずもの静かだ

った。いまま祖父の様子が浮かぶ思い

出がある。

家族全員で海に出かけた。僕が五歳

のときだ。昭和三十年代、まだ東京湾

に海水浴場がいくつもあつた時代であ

る。砂浜で俺は迷子になった。近くに

いるはずの爺ちゃんがない、お姉ち

ゃんたちも婆ちゃんもお袋も見あたら

ない、だれもないことに気づいて、

急に不安になり、半泣きになって探し

歩いた。そのあとはよく覚えていない

が、見つからずに大声で泣きじやくつ

ていたらしい。

けつきよくみんなと出合うことにな

るのだが、そのとき婆ちゃんがあるの

さ。ごい剣幕で爺ちゃんを怒るのである。

坊やが迷子になったのはいっしょにい

た爺ちゃんのせいだというわけであ

る。爺ちゃんは、何もいわず怒られっ

ぱなしなのだ。ただ大きな目をくり

くりさせるだけである。俺は爺ちゃん  
の顔を見あげて、爺ちゃんの手を握っ  
た。

洋間で爺ちゃんと俺はテーブルをは  
さんですわっていた。そこに末のお姉  
ちゃんがお菓子をもってきて、テーブ  
ルに置いた。爺ちゃんの手がお菓子に  
のびてきたとき、お姉ちゃんは爺ち  
ゃんの手をピシッとたたき、「これはお父  
さんにもつてきたんじゃないの、坊や  
にもつてきたの」と怒った。爺ちゃん  
はすつと手を引つ込めて、大きな目を  
開けて口を尖らせている。何もいわな  
い。その表情を見て、ちよつとかわい  
そうな気がした。怒った爺ちゃんは見  
たことがない。とにかく優しくかった。  
タケシは俺たちをどのように見ている  
のだろう。

お袋のタケシにたいする反撥はつよ  
い。母の式部が亡くなり、その後どの  
ような少女時代を過ごしたか……、タ  
ケシに恨み言をぶつけていたようだ。



## 結婚前の不安

戦線が中国大陸から南方に広がり、軍費が膨張し経済が行き詰まって、昭和十八年を迎えるころには、国内でもものが不足し混乱していきます。国家をあげての総力戦ですから、すべての国民や物資が戦争のために動員されました。このころ日本軍は南太平洋の島々では敗退したり玉砕したりして、戦況は悪化の一途をたどっていたようです。

国内では、毎日あちらこちらで出征軍人の壮行会がおこなわれていました。私の家でも、店をしきる番頭さんから小僧さんまで次々と召集され、戦場におもむいていきました。男手ばかりでなく、家事手伝いの女中さんも徴用されて郷里へ帰っていったのです。広い家が淋しく感じられました。

私は、女学校を卒業して家にいましたから何かしないといけないという気持ちになり、掃除や洋服の仕立てを始めたのです。三人の妹たちのために、小さくなって着られなくなった洋服二着を一着につくり直したりしました。可愛らしく仕上がって、妹たちはたいへん気に入ってくれた。その喜ぶ姿が嬉しくて次から次へと縫いました。

近所からも生地を持ってきて、縫って

ほしいといってくる人もいた。スカートやブラウスなどは案外簡単に仕立てられるので、調子に乗って次々につくりました。仕立て賃をいただいたときは、ほんとうにうれしかった。「スポンサーになりますよ」という人まであらわれたのです。

母は「この子は、大阪への御縁がありますので」と顔を赤らめてお断りすることがあったくらい、評判になっていました。女中さん代わりの家事手伝いと洋服の仕立てで、お小遣い稼ぎをさせてもらいました。

七月に入ったころ、鹿児島のお友達仲人をされたご主人に召集令状がきたというのです。それで、ぜひお逢いしておきたいと思い、母に「鹿児島へ行きたい」というと、母は「それなら、大阪の様子を知りたいから、私もいっしょに行く」という。そのうえ伯母が「もしかすれば、結納や結婚の予定などを決める話になるかもしれない。大阪は東京としたりが違おうし、二人では心許ないので、私もいっしょについて行ってあげよう」といいだして、けつきよく三人で急遽訪問することになったのです。それから早々に大阪へ発ちました。

夜汽車にゆられて十二時間、大阪駅に着いたのは明け方。駅前の旅館に部屋をとって、「初めて行くのだから」といわれ私は着物に着替えさせられました。それから汽車で茨木にむかいます。車窓を流

れる景色は、見渡す限り広がる青田でした。

茨木駅は閑散とし、いかにも田舎だといふのが最初の印象です。改札口を出て、石ころの多いでこぼこ道を歩いてゆきます。夏の太陽がざらざら照りつける中を、慣れない着物を着てトランクを片手にもつ私の姿は、表現の言葉がないくらい不格好だったと思います。いまでもその姿を想像するだけで、恥ずかしくて冷や汗がでます。

いくら歩いても同じ場所を歩いているような家並みを通りすぎ、一時間歩いてようやくお寺が見えてきました。まわりは田んぼだらけ、この現実を見せつけられて、「こんな田舎だったのか。都会育ちの私が、このような何一つ物音もしない静かな田んぼの中で暮らせるのだろうか」と嘆息しました。次の瞬間に涙がこみ上げてきて、一心に歩きつづけてきた足が釘付けになり、「お母さん、私この縁取りやめにしてほしい」と正直な気持ちを思わず口にしてしまったのです。その私の言葉に母も伯母もびっくりして、開いた口がふさがらないという顔です。「いまさら何をいうの。あなたが承知した縁談でしょ。ここまで来て、親に恥をかかせるつもり？ いい加減にしなさい」とめつたに怒らない母が私に向かって声を荒らげたのです。「紹介してくれた鹿児島のお友達の仲人さんにお礼をし、

これからのことをお願いに行くつもりなのに、縁談を取りやめてほしいとは何ごとですか」と叱られました。母は「お嫁に行くということをお母さんはどう思っているの？ お嫁さんが頭に角かくしをして白無垢着て胸に短剣をさして嫁入りするわけを知っているの？」という。実をいうと、そのとき私は知りませんでした。「ああ、そうね。たいていそのような姿でお嫁にゆくわね」とごまかしていましたが、私は真剣にこの縁談を取りやめようかなと迷っていたのです。

よくよく考えると、それは親の顔に泥を塗ることになるし、たいへんな親不孝にもなると悟って、私のわがままを母にあやまりました。私は母からこんなにきつくいわれたことはなかったのです。「お母さんよくわかりました」と母の手を握り、心の中で「お母さんに負けないような立派なお嫁さんになります」と誓いました。

はるか遠くに見えたお寺の屋根がだんだん大きくなって、釣り鐘堂も見えます。周囲の家がみな藁葺屋根なのにはびっくりしました。

「まあ、なんとかなるでしょう。がんばります。母のためにも……」



◇魚あれこれ◇  
釣りいろいろ②

黒鯛(チヌ)

周防春日丸

黒鯛よりもチヌと言ったほうがピンとくるかもしれませんが……、黒鯛は真鯛と同じタイ科の魚で、真鯛の赤に対して黒っぽい色である。呼び名は、幼魚はチンチン、若魚をカイズ、チヌ、カワダイ、チンなど所によって違うのである。

チヌを釣る人が多いなか、本格的にチヌ釣りをしたことはなく、いつものメバル釣りでたまたま釣れるというこ  
とである。私には何故かチヌ⇨赤土なのである。昔、チヌ釣りに行く人は必ず赤土を掘っていたようである。それとも、赤土を掘るのを見てチヌ釣りかなと思つたのかもしれない。集魚材としての赤土は磯が荒れるからと使つてはいけないらしい。今はさなぎ粉が主流のようである。

それに、どうしてもあまり水のきれいな所ではなく、汚い所にいる魚のイメージがあり、磯臭いというよりも泥臭いと思つてしまうチヌである。

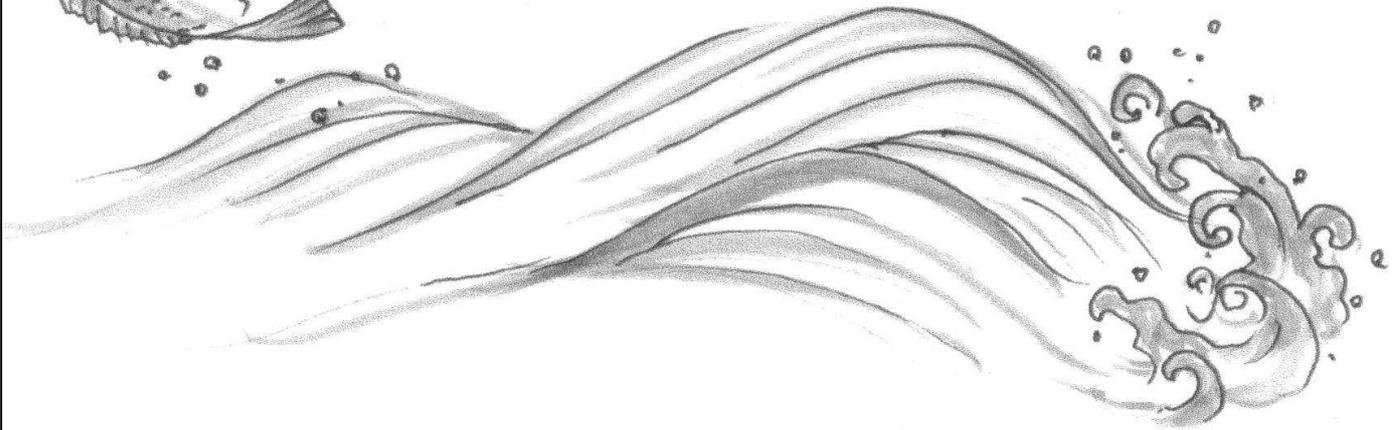
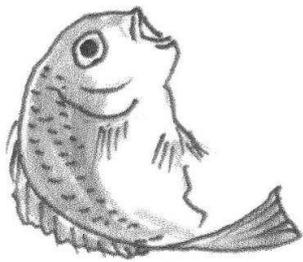
主に浅瀬を住み処にしているチヌは、聴覚・視覚・嗅覚で安全かどうかを判断するらしく、警戒心が非常に強い。だから音を立てない。話し声や足

音などである。次に人影を見せない。

魚は近視だと言われるが、人の影く  
らひは判断できるらしい。その反面、  
普段聞きなれている音などには鈍感の  
ようである。船着き場には船の音など  
気にもしないで悠々と泳いでいるチヌ  
をよく見ることがある。蛸時期に船で  
蛸の頭を返して黒味(墨)などを捨てる  
と集まつてくることもある。

釣りではなく、投網に同行してチヌ  
を捕つたことがある。満潮近くになる  
とチヌはかなりの浅瀬まで寄つてく  
る。肉眼でも見えるが、偏向グラスを  
掛けるとよりはつきりと見えるのであ  
る。道路沿いの波除けの上から、この  
チヌを目掛けて投網をうつわけである  
が、声を出さない、足音を立てない、  
覗き込んで見ない、それから白い色に  
は警戒するらしく、注意をする。

若いチヌは雄でもあり雌でもある  
「雌雄同体」なのである。一生のうちで  
始めは雄として、その後雌に性が変わ  
る性変化をする不思議な魚である。ず  
っと雄のままのものもいる。



川柳

真本嘉代子

☆ 芥川品格添える梵の店

☆ 若返る川柳競う波に乗り

☆ 猛暑過ぎ心気一転旅に出る

読者からのたより

拝復

仲秋の候と相成りました。お便り有難うございました。尾も白い(おもしろい)芥川だよりの「犬の視線」上手に書いてられるわ。かしこ

Iさん

「芥川だより・ハイキングのお誘い」

日時／十一月八日(木) 九時梵集合  
予定コース／神峰山寺の紅葉を楽しむ

編集後記

いつの間にやら神無月から霜月に替わる時節になった。秋の稲刈りの稲束を荷車に積み家路に急いだ夕暮れ時、陽が西の空にあつという間に隠れ暗闇になつたつるべ落としを思い出す。  
あと二ヶ月もすれば正月である。あつという間の一年。貴方の思いを書いてお寄せください。

## サラリーマン・エッセイ② 思い出の人①

明石 幸次郎

私は、この八月まで鋳物工場に勤務していました。鋳物と言っても「それは、どんなもんやねん」という問いが返ってきてそうですが、一番分かりやすいのは、自動車のエンジン本体そのものです。あれは鋳物（材料はねずみ鋳鉄と呼ばれる）で出来ています。私の勤務していた工場は、この様なエンジン鋳物も作っていますが、大型の鋳物も数多く作っています。

鋳物と言えば、吉永小百合主演の「キュボラのある街」という映画を私達の世代は思い出します。あの映画の設定は当時、中小の鋳物工場が多くあった埼玉県の川口市でした。現在は、多くの鋳物工場は姿を消して、跡地にマンションが建てられています。"キュボラのある街"はすっかり様変わりして、東京から三十分通勤圏内のベットタウンとなっています。今も鋳物工場が少しは残っていますが、大多数は廃業して土地を売るか、郊外に移転するか、中国・ベトナムなど海外に工場を移してしまいました。

私がいた鋳物工場は大阪市内にあり、四百人くらいが昼夜二交代で働いています。今回は、その工場が私が強

く印象に残ったHさんを紹介します。

Hさんは、九州鹿児島県の田舎の中学を卒業して、鋳物工場の訓練生（見習工）として入社して以来、六十九歳になる現在まで、現場で鋳物づくり一筋の道を歩んでいます。Hさんは六十歳の定年が過ぎても、その鋳物作りの技術と経験が会社から評価され、今も現役（フルタイム）で、若手の指導員も兼ねて現場の第一線で、汗水と鋳物砂にまみれながら働いています。

鋳物工場は3K（きたない、きつい、危険）職場の代表のように言われ、夏は場所によって50℃近くまで気温が上がり、冬は-5℃近くまで気温が下がります。その中でHさんのように長く仕事をやり続けるには、働く人の自己管理と仕事に対する前向きな姿勢が必要とされます。「働かされている」という姿勢では続きません。

Hさんは毎朝、顔を合わせるたびに「ニッコリと笑って」「この年で、まだ仕事させてもらって、ほんまに感謝します」と挨拶してくれます。これに対して「まだまだ、死ぬまで働いて下さいよ。たのんまつせ！」と返事するのが朝の日課でした。今も少年のように目を輝かせ、元気に大声で若手にキビキビ指導しているHさんの姿を見るのが何よりの楽しみであり、彼からプラスのエネルギーをもらっていました。ある時、Hさんが現場で珍しく険

しい顔で立っていました。「何かあったんですか？」とたずねると、

「あんなシャブシャブの湯（銑鉄とスクラップなどをキュボラという設備を使って溶かした1000℃位だった溶湯を俗に「湯」と呼んでる）では仕事にならんわ。何べん言うても聞きよらんから返したんですわ。あんな湯を使ったらロクな鋳物が出来んわ」

と温厚な人がえらい憤慨しているんです。「どうしてシャブシャブと判るんですか？」と訊くと、

「湯の顔色を見たらすぐに判りますわ。色が違うんです。あんな悪い湯を使えば出来た鋳物に欠陥が出るんです。鋳物は正直ですよ。お前ら、こんな湯を使ってわしにエエ仕事せえと言うんか、もつとましな湯をもって来い。安物のスクラップばかり使ってコストダウンを図ることも大事やけど、出来た品物が悪かったら結局客先に迷惑が

かかり、会社の信用を落とすことになる。強いては客先から注文が来なくなつたらわしの仕事もなくなるやないか、違いますか？ 明石さん！」

「ほんまHさんの言われる通りです。私も営業やっついてよく判ります。現場で働く人が皆んなHさんのような意識で仕事をしてもらったら、営業もクレーム処理に走り回らんで楽させてもらえるのに。」

ところで、Hさん、先ほど湯の色のこと言われましたが、これは作業マニュアル通りにはいけませんか？」

「いや、そこですわ。これはマニュアル化は出来しません。永年の経験とカンドですわ。」

わしみたいに長い事やっていたら微妙な違いをお湯の色を見てすぐにエエか悪いかの見分けがつくんですわ。鋳物はうそはつきません。正直ですよ、手を抜いてごまかしたらすぐに出来た鋳物が答えをだしますわ。えらいもんです。鋳物は生きものみたいなもんです。まあ鋳物作りは子育てと一緒にすなあ。手を抜いたらロクな子が出来んわ。わしとこの娘と一緒に。はっはっは」

という風に話し出すと、何時間でも話がつきない。Hさんのような人達が、日本のものづくりをささえてきたのです。

